

フェスティバル/トーキー実行委員会		
顧問	野村 勇	公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 会長・能楽師
	福原義春	株式会社資生堂 名誉会長
名誉実行委員長	高野之次	豊島区長
実行委員長	森田 信	アサヒグループホールディングス株式会社 相談役
副委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
	栗原 直	豊島区文化工部部長
	東澤 昭	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長
委員	岡田恭子	株式会社資生堂企業文化部長
	尾崎元規	公益社団法人企業メセナ協議会 理事長・花王株式会社 顧問
	熊倉純子	東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 教授
	小沼克年	アサヒビール株式会社社会環境部 部長
	鈴木正美	東京商工会議所豊島支部 会長
	扇田昭彦	演劇評論家
	永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター 会長
	小澤弘一	豊島区文化工部文化デザイン課長
	岸 正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	小島寛大	NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事
監事	鈴木さよ子	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登(骨董通り法律事務所)	

ディレクターズコミッティ	
代表	市村作知雄
副代表	小島寛大
メンバー	楢松祐子、河合千佳、喜友名織江、長原理江、横橋応彦

フェスティバル/トーキー実行委員会事務局	
事務局チーフ	蓮原円花
制作	小島寛大、楢松祐子、河合千佳、喜友名織江、高橋マミ、十万垂紀子、松嶋瑞奈、荒川真由子、横橋応彦、山むとみ、砂川美織、松宮俊文、守山真利恵、横井貴子
広報	楢江紗恵、湯川裕子
企画営業	長原理江
票券	渡邊絵里、穴戸 円
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
事務局アシスタント	平田幸実
経理	堤久美子
総務	蓮池奈緒子、一色壽好、横川京子

技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	加藤由紀子
照明コーディネーター	佐々木真喜子(株式会社ファクター)
音響コーディネーター	相川 益(有株式会社サウンドワイズ)
アートディレクション&デザイン	河村康輔
メインビジュアル	二階謙サトシ(SHOHEI×河村康輔)
ウェブサイト	濱田真一+番松 佑+菅原直也(株式会社ロフトワーク)
海外広報・翻訳	アンリユーズ・ウィリアム
物販	渡辺 淳
執筆・当日パンフレット編集	鈴木理映子

アジアシリーズ・プログラミング	李 丞孝
シュリンゲンジープ特集 企画・コーディネート	ウルリケ・クラウトハイム

主催：フェスティバル/トーキー実行委員会、豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター
アジアシリーズ共催：独立行政法人国際交流基金(国際交流基金 東アジア共同制作シリーズ vol.2)
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)、J-WAVE 81.3FM
特別協力：西武池袋本店、東京百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、デパート株式会社
協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人 豊島法人会、池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファ池袋まちづくり、ホテルロボロタン、ホテルグランドシティ、池袋ホテル会
宣伝協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー

アーツカウンシル東京	フェスティバル助成
(公益財団法人東京都歴史文化財団)	

平成28年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ(地域/としま/東京アーツプロジェクト 事業)

公益社団法人企業メセナ協議会　2021 芸術・文化による社会創造ファンド 採択事業

フェスティバル/トーキー14は東京クリエイティブウィークスと広報連携しています。

会期：2014年11月1日(土)～11月30日(日)

インター:阿部佑加、入江都美、岡崎由美子、加藤希美、加藤彰、神永真美、川村知也、北村未来、木田みのり、佐藤隆毅、清水千奈美、杉本真理江、高橋雅臣、田中秀樹、田中沙織、田中直子、遠山高江、中村みなみ、萩原千亜紀、橋本萌、針谷慧、平石直輝、福地沙絵、三羊乃乃、山下登枝、山口将輝、吉原早紀

ET/フルー:青柳佐代子、秋元エマ、阿久根夕佳、朝倉知世、浅川喜子、熱田明美、阿部敬子、荒井純奈、新井順行、有本裕美子、安藤香里、五十嵐未来、井口真帆、井手上紗織、今川涼香、上野智美、榎悠里、大塚幸、大迎美希、大出晴、小川真理子、小山内梓希、小野香ありす、畑田みずき、加藤千夏、片山悠太郎、桂星穂子、加藤真帆、菅野沙和子、北原七海、児輪祐佳、小林惠理子、境田博志、佐川深根、崎澤亮哉、榎彩夏、飯原沙織、島根悠子、霧島桜子、鈴木茜、岡島悠生、高橋志緒、高松章子、田中正雄、民谷絵美子、津田貴生、照沼静香、渡並航、富永愛香、中俣恵美、中川朋子、中村直樹、中村光子、中村光子、根本明美、波田野子乃、峰谷翔子、林ひかり、平野桃里、胡瀬、藤田さゆり、富士原和代、又村実穂、三ツ木孝輔、松永愛子、宮川学、宮内隆生、森田結香、山口侑紀、四浦美希、吉田美幸、四方田結子、跡見学園女子大学 曾田ゼミシンカワゼミ

					
豊島区 TOSHIMA CITY	公益財団法人 としま未来文化財団	ANJ NPO法人アートネットワーク・ジャパン Arts Network Japan			
JAPAN FOUNDATION 国際交流基金	Asahi アサヒ株式会社	SHI/EIDO	ARTS COUNCIL TOKYO		

発行：フェスティバル/トーキー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 TEL:03-5961-5202 http://festival-tokyo.jp/

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキー実行委員会 デザイン：小林 剛 (UNA)

Festival/Tokyo Executive Committee
Advisors: Man Nomura, Chairman, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations, Noh Actor Yoshiharu Fukuhara, Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.
Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chair of the Executive Committee: Hitoshi Ogita, Adviser to Board, Asahi Group Holdings, Ltd.
Vice Chair of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Director, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Akira Kurihara, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City

Akira Touzawa, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Committee Members: Kyoko Okada, General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.
Motoki Ozaki, President, Association for Corporate Support of the Arts, Corporate Advisor, Kao Corporation
Sumiko Kumakura, Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts
Katsutoshi Konuma, General Manager, Social & Environmental Department, Asahi Breweries, Ltd.
Masami Suzuki, Chairman, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima
Akihiko Senda, Theatre Critic
Taeko Nagai, Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Kouchi Ozawa, Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City, Director of Cultural Design Section
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuike, Representative, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Hirotomo Kojima, Board Member, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Supervisor: Sayoko Suzuki, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Directors Committee
Representative: Sachio Ichimura
Deputy Representative: Hirotomo Kojima
Members: Yuko Uematsu, Chika Kawai, Orie Kiyuna, Rie Nagahara, Masahiko Yokobori

Executive Committee Office
Administrative Manager: Madoka Ashihara
Production Co-ordinators: Hirotomo Kojima, Yuko Uematsu, Chika Kawai, Orie Kiyuna, Mami Takahashi, Akiko Juman, Lina Matsushima, Mayuko Arakawa, Masahiko Yokobori, Hitomi Oyama, Shiori Sunagawa, Toshifumi Matsumiya, Marie Moriyama, Takako Yokoi

Public Relations: Sae Horie, Yuko Yokawa
Sales & Planning: Rie Nagahara
Ticket Administration: Eri Watanabe, Tsubura Shishido
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Office Assistant: Saki Hirata
Accounting: Kumiko Tsutsumi
Administrators: Naoko Hasuike, Hisayoshi Ishiki, Kyoko Yokokawa

Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Yukiko Kato
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Art Direction & Design: Kosuke Kawamura
Main Graphic Design: Satoshi Nikaicho (SHOHEI x Kosuke Kawamura)
Website: Shinichi Hamada + Yu Shigematsu + Naoya Sugawara (loftwork Inc.)
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Writing, Performance Leaflet Editing: Rieko Suzuki

Asia Series Programming: Seunghyo Lee
Schlingensief Film Series Programming: Ulrike Krautheim

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Asia Series co-produced by the Japan Foundation (The Japan Foundation East Asian Collaboration Vol.2)
Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.
Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO, Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), J-WAVE 81.3FM
Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chacoott Co., Ltd.
In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association
PR Support: Poster Hari's Company
Supported by Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2014 (Ikebukuro/Toshima/Tokyo Arts Project Enterprises)
Supported by Association for Corporate Support of the Arts, Japan (2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture)
Publicity Partner: Tokyo Creative Weeks

Period: November 1 (Sat) to November 30 (Sun), 2014

さらば！ 原子カロボむつ ～愛・戦士編～

渡辺源四郎商店　作・演出：畑澤聖悟

11/28 (Fri) – 11/30 (Sun)

にしすがも創造舎

Nishi-Sugamo Arts Factory

Farewell to Nuclear Robot Mutsu Soldiers of Love

Watanabe Genshiro Shoten

Text, Direction: Seigo Hatasawa [Japan]



もしイタ

～もし高校野球の女子マネージャーが青森の「イタコ」を呼んだら

作・演出：畑澤聖悟

11/28 (Fri) – 11/29 (Sat)

にしすがも創造舎

Nishi-Sugamo Arts Factory

Moshi-ita – What if the manager of a high school baseball team called in an Aomori itako shaman?

Text, Direction: Seigo Hatasawa [Japan]

インタビュー 畑澤聖悟 地域からのまなざし、高校生と共に育つ作品



核廃棄物をめぐるさまざまな葛藤を人情劇に込めた『さらば！原子力ロボむつ〜愛・戦士編〜』、震災でチームメイトや家族を失った少年の成長を描く『もしイタ』。東日本大震災以後の東北の現実を、演劇の想像力を通して伝える2作品は、いかに生まれ育ったか。地域の暮らしに根ざした創作、その眼差しが捉える「現在」とは――。

自身の創作の両輪となる2作を2本立てで

—F/T初参加にして2本立て公演、加えて高校演劇部として参加するという事はフェスティバルにとっても画期的なことかと。自身の劇団・渡辺源四郎商店(なべげん)と、教員として勤務し、顧問を務める青森中央高校演劇部は畑澤さんにとって欠かせない創作の両輪ですね。

畑澤 この二つの団体で活動するという事は、僕にとって「青森という地方、田舎で演劇をしていること」と「高校演劇は世間的には軽んじられがちである」という、創作の大前提にして、大きなコンプレックスでもある「現状」を常に意識しながら作品をつくることを促してくれる。それこそが、僕が演劇を続ける大きな原動力です。

—『さらば〜』は2012年になべげんで初演した『翔べ！原子力ロボむつ』(ロボむつ)のリ・クリエーション作品ですが、それ以前に今夏、『さらば〜』を高校演劇版にもしたとうかがいました。

畑澤 なべげんや外部へ執筆した作品の題材に、別の視点や切り口を加えて高校演劇版を創作する作り方をここ数年続けています。一番の理由は新作をゼロから立ち上げる余裕が自分になかったことですが(苦笑)、やってみると「高校生が演じるための必然性」を作品に加味することが、予想以上に創作の可能性を広げてくれたんです。高校演劇版『ロボむつ』はその成功例のひとつ。

核サイクル施設や中間貯蔵施設に加え、核燃料再処理場もできるだろうという土地が自分の暮らす県内にある。そのことが、高校生にとってどういう意味を持つのかを改めて考えたとき、「これは世代の問題だ」と思い当たった。施設は高校生たちの祖父母の世代が誘致したもの。施設で扱うものは危険極まりない代物で、10万年経たなければ安全にはならないという。そんな誰にも責任の取れないことを「丸投げにした世代」と「丸投げにされた世代」、両者を対比させることで、10万年という途方もない時間にある種のリアリティを持たせられるのではないか、というのが発想の起点です。高校生版の創作で感じた手応えを、今回の『さらば!〜』でさらに深化させたいと思っています。

—出演は、なべげん劇団員と客演に青森中央高校演劇部員も加わる混成チームです。

畑澤 チーム編成は、青森港に博物館として係留されている青函連絡船・八甲田丸船内で2012年から上演している市民参加劇で得たノウハウを活かしました。今回のF/Tの別プログラム「まなびのアトリエ」では昨年の第二弾「私と空と八甲田丸」が上映されますが、このシリーズでは演劇経験のない一般市民の方となべげんメンバーの間を、演劇部員が「埋めて」いるんです。部員たちはアンサンブルとして群集役などだけでなく、船に併走するカモメやイルカの群れ、波や風音などの音響効果までもすべて身体と声で表現します。

これは今回上演する『もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の「イタコ」を呼んだら〜』で培ったスキル。被災地の方々に演劇で何が出来るかを考えたとき、身ひとつでどんな場所へでも行き、高校生たちのエネルギーを感じてもらふことしかないという発想から生まれた『もしイタ』は、衣裳や大小の道具類、照明・音響効果も一切使わないという上演形態。彼らは体育館やグラウンドなど何もない場所に劇空間を立ち上げ、シーンを想像してもらふための



『翔べ！原子力ロボむつ』(2012年)

表現を身につけている。「人は石垣、人は城」の言葉どおり、SF的な色合いの濃い『ロボむつ』に物量的なスケール感をプラスできる、最高の助っ人だと思っています。

—戯曲の内容的に新たに加味されるものはありますか。

畑澤 劇中、舞台となる架空の町が、自分たちに押しつけられた核関連施設を盾に日本から独立したうえ、首都・東京に宣戦布告するという場面があるのですが、その辺りをもう少し書き込みたいと思っています。そもそも『ロボむつ』は、東京の観客に見せることを強く念頭に置いた作品。青森に核サイクル施設があることも、他の地域の原子力発電所に関しても、その裏側には地方と東京の「対立の構造」がある。東京の都市機能を保つための発電、その廃棄物がなぜ青森に集められるのか。そのことを、少しでも考える機会を演劇でつくりたかった。宣戦布告の場面は、そんな僕のささやかな復讐心を込めて書いたもので、そこはもっと掘り下げたいと思っています。

—そういった「地域からの視線」を演劇で突きつけられる機会は、東京の演劇シーンではあまりないと思います。

畑澤 そもそも「差別」というものは、“する側”には特別な意識はなく“される側”に問題があるんですよね。たとえば台風を伝えるキャスター。キー局のニュースで彼・彼女らは、台風が東京を通過した時点で“終わった”ような発言を普通に。確

かに北上するうち台風は弱まるけれど、宮城あたりが暴風域だということに対する配慮が感じられない。そういう言葉どころか意識にも上らないレベルの差別を、いくら“する側”に語っても“される側”の気持ちは伝わりません。でも演劇でなら、戯画化した表現を含め、少しは突きつけられるのではないかと。『ロボむつ』はそんな想いから生まれた作品です。

高校生たちの“埋める力”が作品の要になる

—『もしイタ』初演が2011年秋、『ロボむつ』は2012年春初演。両作品にはやはり、東日本大震災の影響が大きいのでしょうか。

畑澤 もちろんです。2011年3月11日の直後は遠方に暮れました。「震災の当事者でない自分」を強く感じたからです。青森県の被害は、沿岸部では津波のあったところもありますが、実質は数日の停電とガソリンや灯油などの不足程度でした。被害が深刻な三陸沿岸や福島からは表現としても、湧き上がる声としても圧倒的に強いものが出てくるだろうそのとき、語弊のある言い方も知れませんが、青森にいる自分には何が出来るかを考えてしまった。大きなくくりで言えば「東北」という同じエリア、コミュニティにいて、そこで起こった大き過ぎる出来事に無関心ではいられないし、自分がつくる作品に影響が出ない訳もない。どうすべきか悶々とするなかで出した結論が、「距離」には誠実になろう

ということでした。

被害の大きかった地域や都市との距離、深刻な打撃を直接受けた方々との距離。今回の2作はそれら「距離」を、創作過程で熟考した作品です。『もしイタ』は青森が舞台ですが、劇中に震災によってチームメイトや家族を失った高校生を一人登場させることで成立させられた。一方の『ロボむつ』は、地域も人も完全に青森のみ。だからこそ東日本大震災の裏側にあるもの、震災の遙か以前から脈々と続く、無意識下の東北差別を東北の視線から見る、という構造の作品になったのだと思っています。

—特に『もしイタ』は東京に限らず、13都県2700市町以上で上演され続けている。これは従来の高校演劇の領域を越えた展開と成果でしょう。このことにより、畑澤さんの演劇に関する指針や定義に変化はありましたか。

畑澤 実は『もしイタ』の展開について、特別な感慨も違和感もないんです。作品の認知が高まることで、被災地への慰問公演などに批判的だった周囲が手の平を返した態度にはなりましたが(笑)。

なべげんの俳優は他に仕事を持っている人間が多いので、頻繁な遠征公演やロングランは難しい。でも高校生ならば休みを上手く使えばそれができる。なべげんではできない「演劇でやりたいこと」が、高校演劇部ではできたんですね。それはもちろん、学校や保護者の方々の理解を得たうえでのことですが。

最初は『もしイタ』のツアーは2~3年くらいの期間とっていました。でも去年、アンケートなどの感想に「こんなこともあったのだ、と思い出しました」という言葉があるのを見て、人の記憶の中の風化の速さにゾツとした。これは意地でも上演し続けなければいけない、と改めて思ったんです。その点では、今回のフェスティバルへの参加も良い機会だと思っています。

—公演以外にも、今夏はF/Tの企画の一環として東京の高校生対象のワークショップもされました。

畑澤 演劇部員ではない生徒も多く、面白い体験でした。オリジナルをその場でつくるのではなく、『もしイタ』を一緒につくるワークショップですから、あまり青森の高校生との違いなども感じず、集中して芝居づくりに取り組む時間になったと思います



2014年6月 『もしイタ』公演を行った石巻・大川小学校にて
提供：青森県立青森中央高校演劇部

す。うちの部員3人と、東京にいたOG・OB3人がサポートに入りましたが、結局3日間で『もしイタ』全編をつくってしまった。高校生の吸収力にはいつも目を見張ります。

—その吸収力、適応力をフルに活かしたのが今回の2作ですね。

畑澤 ええ、部員たちは、たとえば本番当日に欠員が出たとしても、少し打ち合わせをすればその場で穴埋めできてしまう。先日も稽古中一人過呼吸状態で倒れたのですが、芝居を続けながら患者を休憩室に運び、介抱しながらも、結局全編演じ通してしまった。僕がアバウトな人間なもので、何か事が起きると「なんとかしろ」「はい、なんとかします!」というやりとりが部内では日常的で(笑)、そのせいかうちの部員は“埋める力”=現場適応力が非常に強い。この公演でもその“埋める力”をお見せできるはず。結果、これまでのF/Tには少なかったであろう高校生や高校演劇に関わる方たちにも、足を運んでもらえたらいいなと思っています。

(取材・文=尾上そら)

はたさわ・せいご

1964年秋田県生まれ。劇作家、演出家、渡辺源四郎商店主宰。青森市を本拠地に全国的な演劇活動を行なうほか、他劇団への書き下ろしも数多く手がける。『俺の尻を越えていけ』で2005年日本劇作家大会短編戯曲コンクール最優秀賞受賞。『翔べ! 原子カロボむつ』で第57回岸田國士戯曲賞ノミネート。ラジオドラマの脚本でも文化庁芸術祭大賞、ギャラクシー大賞、日本民間放送連盟賞などを受賞。現役の公立高校教諭であり演劇部顧問。指導した青森中央高校および弘前中央高校をあわせて8回の全国大会に導き、最優秀賞3回、優秀賞4回を受賞している。

青森中央高校演劇部と顧問・畑澤聖悟

工藤千夏(渡辺源四郎商店ドラマターグ)

『修学旅行』からポスト『河童』まで

青森県立中央高校は、これまで高校演劇の全国大会に8回出場し、3度日本一に輝いている。

2003年9月の青森県東青地区大会、私は『修学旅行』誕生に出会った。今や高校演劇界で知らぬ者はいないスタンダード作品だが、その衝撃たるや! テーマ性など意識せずに女子高生のけんかやギャグに大笑いしていた観客は、いつのまにか、この修学旅行の真の目的地に連れて行かれている。2005年夏の全国大会(青森)で最優秀賞に輝いた上演は、八戸市公会堂ホールが一つになって笑いどよめき、うねり、クライマックスの枕投げに歓喜し、そして、しんみりとラストを迎えた。まさに演劇の神様が微笑んだ奇跡であった。

2008年、青森中央高校が再び高校演劇日本一に輝いたのは、『修学旅行』と真逆とも言えるトーンでいじめを描き、差別の構造を鋭くえぐり出した『河童』であった。実は、いよいよ全国大会(群馬)出場という春に、畑澤は青森県立弘前中央高校に転勤となり、その後しばらくは戯曲提供という形に関わることになる。部活動の時間に演劇部員とともに作品を練り上げることができない状況で、翌2009年の『ともことサマーキャンプ』は、畑澤が高校演劇以外のフィールドで執筆した『親の顔が見たい』のテーマを、高校生の視点で掘り下げていく道を選んだ。

ちなみに、畑澤が弘前中央高校演劇部のために潤色した『あゆみ』(作/柴幸男)は、弘前生まれの一人の女性の生涯を描き、2010年の全国大会(宮崎)で優秀賞を受賞した。奇しくも、全国大会出場の春に青森中央高校に転勤となったが。

再び青森中央高校演劇部の顧問となった畑澤は、『イノセント・ピープル』取材時に想を得たプロットで、『私たちはサルではありません』を執筆する。核の問題、被害者と加害者の関係や意識等、畑澤がこだわるテーマの集大成とも言える意欲作だが、

これまでの青森中央高校演劇部の方法論やカラーと、今ひとつ噛み合なかった感が否めない。そんなとき、東日本大震災が起こったのである。

『もしイタ』被災地応援公演はじまる

青森市の被害状況は2日間余の停電と灯油不足程度で、津波の被害を被った八戸市や、福島県、岩手県、宮城県と比べるべくもない。演劇部員たちは懸命に考えた。なんとか、演劇で被災地の人々を元気づけることはできないものだろうか。たとえ電気がなくても、劇場でなくてもできる芝居はないだろうか。

こうして、東日本大震災によってチームメイトや家族を失い、青森に転校してきた主人公の成長を描く『もしイタ〜もし高校野球のマネージャーが青森の「イタコ」を呼んだら』が生まれた。大きな特徴は、舞台装置、照明、音響、小道具を使用しないこと。避難所として使用された体育館や集会場での上演しやすさを前提に考案された演出である。ホール上演の際も、地明かりはつけるが、効果音やBGMはすべて肉声のまま。衣裳もTシャツと学校指定のジャージ。とにかくシンプル。すべてを人間が表現するこの演出は、演劇の、芸能の原点を想起させる。

もう一つの特徴は、全員が常に観客の目にさらされている、つまり、出づっぱりであること。30名前後の演劇部員が全員舞台を駆け回り、劇中歌を歌い、木やカラスや時計やチャアガールや……それぞれが平均10役以上を演じ分ける。「演技をしたくて演劇部に入った高校生は、全員出演」という演劇部顧問としての畑澤の信念が結実した。

2012年の全国大会(富山)で上演した『もしイタ』で、青森中央高校演劇部は3度目の最優秀賞を受賞する。審査員の西堂行人氏をして「2012年にこういう作品が生み出されたことは、事件」と言わしめたが、被災地応援公演を積み重ねたからこそ、

人の心を打つ作品としての強度を増したのだと思う。八戸市、気仙沼市、大船渡市、釜石市、久慈市、仙台市、利府町、宮古市、盛岡市、陸前高田市、石巻市、山元町、塩竈市などの被災地では、バスで着いた演劇部員たちはまず真っ先に会場を掃除した。椅子も自分たちで並べる。ゲネも場当たりもやらない。乗ってきたバスは避難所からの観客送迎車に転じ、観客はやたら元気なウォーミングアップを観ながら着席する。心から観てもらいたいから、被災された方々に恥ずかしくないように懸命に演じる。そうやって、2011年9月から2014年11月現在まで、『もしイタ』は全国の15都府県32市町で56ステージ上演された。

では、被災地応援公演を開始した2011年のオリジナル・メンバーの感想を紹介しよう。

- 決して生半かな気持ちではできないと、覚悟を決めました。被災した主人公として、実際の方々の気持ちにどれだけ近づけるか、自分達が元気に演じることで、観て下さった方へ元気を与えられるか、課題は難しく不安も募りました。(工藤和嵯)
- 私がまずしたのは、図書館で当時の新聞記事を集めた本を読むことでした。震災当時は毎日暗いニュースばかりで、それが嫌でテレビを見ずに生活していたので、震災についてより多くのことを知ろうと思ったのです。(松野えりか)
- このお芝居はハチャメチャな話になってます。僕は自分で言うのもあれですが、この劇は面白い好きです。ですが地震で家族や友人を亡くした被災者にこの劇を見せて気分を悪くしたり、いやな思いをしたらと思うと心配でたまりませんでした。でも、劇が終わった後も皆泣きながら帰っていき、「元気になった」「ありがとう」といってくれたことが嬉しくてたまりませんでした。(木谷勇太)
- 上演中に大きな地震が来たらどうしようと、被災地にたどり着く直前まで考えていました。震災で困っている人たちの助けになりたくて稽古をしてきたのに、地震という恐怖から逃げたいと思っていることがすごく情けなかったです。(岡崎涼太)
- 実際に見るまでは、もう大丈夫だろうとかそこま



2014年6月8日 野乃島(塩竈市)提供:青森県立青森中央高校演劇部

ではないだろうという加減なことばかり考えていました。ですが、被災地を見たとき本当に言葉が失いました、これが現実なんだと思いました。(夏井崇仁)

- 自分がどれほど恵まれた生活をしているか、被災地の人たちがどれほどふんばっているか、心に訴えるものがありました。こっちが元気を届けにきたはずが、いつの間にか励まされて元気をもらっていました。(木村妃炉里)
- 今まで以上にこの劇への思い入れが強くなりました。(小寺香織)
- 被災地で見たのは、温かく迎えて下さった現地の被災者の方々の笑顔でした。この人達がどんなに辛く大変なことを乗り越えてきたのか、全く想像もつかないし、その辛さを乗り越えて尚もこんなに明るい顔で迎えていただけるのかととても驚きました。(木村昭陽)
- 復興に向けて地元の方々は一歩ずつ前へ歩んでいると考えると、私たちも立ち止まっている訳には行かないと痛感しました。(蒔苗有紀子)

彼らはすでに卒業し、それぞれの進路に進んでいる。そして、後輩たち、何代目かのマネージャーやイタコや野球部員がどこかの体育館で「栄冠は君に輝く」を熱唱している。畑澤は演劇部と自らの劇団を両輪に全速力で走り続け、2014年の全国大会(茨城)で『翔べ!原子カロボむつ』(優秀賞)、このF/T終了後の東北大会(岩手)に出場する『エレクトリック女子高生』と、「もしイタ・システム」は深化を増している。

『さらば! 原子カロボむつ ～愛・戦士編～』

作・演出:畑澤聖悟
出演:工藤由佳子、三上晴佳、工藤良平、音喜多咲子、奥崎愛野、佐藤宏之、夏井澤菜、松野えりか、畑澤聖悟、山田百次(劇団野の上、青年団リンク ホエイ)、三上陽永(虚構の劇団)、北魚昭次郎
青森中央高校演劇部(蝦名和希、白石竜也、松尾健司、我渴望美、尾崎花梨、折館早紀、未安寛子、赤坂玲雄、吉田夏海、榊史也、豊嶋未沙樹、畠山宏介、吉川侑里、小谷ありさ、松村美里、是川詩乃、三上優葵、山口真実、森雪杜、木村慧、堀慎太郎、三津谷友香、太田奈緒、木村紗智子、近藤三鈴、金野里音、菊池果歩、山崎亜純)
ドラマターグ・演出助手:工藤千夏
音響:藤平美保子
照明:中島俊嗣
舞台監督:中西隆雄
衣裳:イカラシチエ子
美術:山下昇平
プロデュース:佐藤 誠

制作:なべげんわーく合同会社、植松侑子・松宮俊文(フェスティバルトーキョー)
インターン:岡崎由実子、神永真美、清水千奈美
フロント運営:三五ざやか
協力:サードステージ

記録写真:松本和幸
記録映像:株式会社彩高堂「西池袋映像」

製作:渡辺源四郎商店
共同製作・企画・主催:フェスティバルトーキョー

『もしイタ ～もし高校野球の女子マネージャーが青森の「イタコ」を呼んだら』

作・演出:畑澤聖悟
出演:青森中央高校演劇部(蝦名和希、白石竜也、松尾健司、我渴望美、尾崎花梨、折館早紀、未安寛子、赤坂玲雄、吉田夏海、榊史也、豊嶋未沙樹、畠山宏介、吉川侑里、小谷ありさ、松村美里、是川詩乃、三上優葵、山口真実、森雪杜、木村慧、堀慎太郎、三津谷友香、太田奈緒、木村紗智子、近藤三鈴、金野里音、菊池果歩、山崎亜純)
舞台監督:中西隆雄

制作:なべげんわーく合同会社、植松侑子・松宮俊文(フェスティバルトーキョー)
インターン:岡崎由実子、神永真美、清水千奈美
フロント運営:三五ざやか

記録写真:松本和幸
記録映像:株式会社 彩高堂
主催:フェスティバルトーキョー

Text, Direction: Seigo Hatasawa
Cast: Yukako Kudo, Haruka Mikami, Ryohei Kudo, Sakiko Otokita, Aino Okuzaki, Hiroyuki Sato, Miona Natsui, Erika Matsuno, Seigo Hatasawa, Momoji Yamada (Gekidan Nonoue, Whey Theater Linked Seinendan), Yoei Mikami (Kyoko no Gekidan), Shojiro Kitauo
Aomori Chuo High School Drama Club (Kazuki Ebina, Tatsuya Shiraishi, Kenji Matsuo, Nozomi Gaman, Karin Ozaki, Saki Oridate, Hiroko Sueyasu, Reo Akasaka, Natsumi Yoshida, Fumiya Sakaki, Misaki Toyoshima, Kosuke Hatakeyama, Yuri Yoshikawa, Arisa Kotani, Misato Matsumura, Shino Korekawa, Yuki Mikami, Mami Yamaguchi, Yukito Mori, Kei Kimura, Shintaro Hori, Tomoka Mitsuya, Nao Oota, Sachiko Kimura, Misuzu Kondo, Rine Konno, Kaho Kikuchi, Azumi Yamazaki)
Dramaturge, Assistant Director: Chinatsu Kudo
Sound: Mihoko Fujihira
Lighting: Toshitsugu Nakajima
Stage Manager: Takao Nakanishi
Costumes: Chieko Ikarashi
Stage Design: Shohei Yamashita
Production: Makoto Sato

Production Co-ordination: Nabegenwork LLC.,
Yuko Uematsu, Toshifumi Matsumiya (Festival/Tokyo)
Interns: Yumiko Okazaki, Mami Kaminaga, Chinami Shimizu
Front of House: Sayaka Sango
In co-operation with Thirdstage

Photography: Kazuyuki Matsumoto
Video Documentation: SAIKOU DO Co.,Ltd

Produced by Watanabe Genshiro Shoten
Co-produced, planned and presented by Festival/Tokyo

Text, Direction: Seigo Hatasawa
Cast: Aomori Chuo High School Drama Club (Kazuki Ebina, Tatsuya Shiraishi, Kenji Matsuo, Nozomi Gaman, Karin Ozaki, Saki Oridate, Hiroko Sueyasu, Reo Akasaka, Natsumi Yoshida, Fumiya Sakaki, Misaki Toyoshima, Kosuke Hatakeyama, Yuri Yoshikawa, Arisa Kotani, Misato Matsumura, Shino Korekawa, Yuki Mikami, Mami Yamaguchi, Yukito Mori, Kei Kimura, Shintaro Hori, Tomoka Mitsuya, Nao Oota, Sachiko Kimura, Misuzu Kondo, Rine Konno, Kaho Kikuchi, Azumi Yamazaki)
Stage Manager: Takao Nakanishi

Production Co-ordination: Nabegenwork LLC.,
Yuko Uematsu, Toshifumi Matsumiya (Festival/Tokyo)
Interns: Yumiko Okazaki, Mami Kaminaga, Chinami Shimizu
Front of House: Sayaka Sango

Photography: Kazuyuki Matsumoto
Video Documentation: SAIKOU DO Co.,Ltd.

Presented by Festival/Tokyo